

農業共済新聞 千葉版

掲載号	11 月 4 週号
筆者	所属 千葉県農林総合研究センター
	職名及び氏名 研究員 金子 洋平
題名	ナシ黒星病の第一次伝染源と感染について
備考	<p>【表説明】</p> <p>図1 ナシ黒星病の第一次伝染源</p> <p>A：罹病芽基部 B：被害落葉</p>

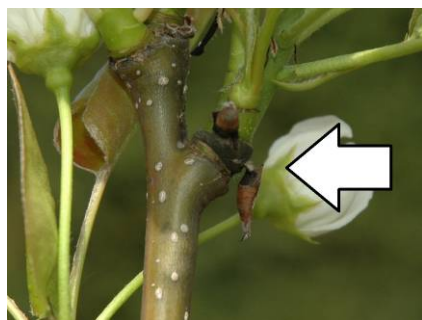
【本文】

ナシ黒星病はナシの地上部病害で最も被害をもたらす病害です。ナシ黒星病の第一次伝染源は、前年の落葉上に形成される子う胞子と、罹病芽基部（主に腋花芽、後に新梢基部病斑となる）上に形成される分生子です（図1）。一次伝染源によって発病したナシ葉や幼果等の罹病部位には、多数の分生子が形成されます。この分生子が再び周囲に飛散し、二次伝染を引き起こします。このため、ナシ黒星病の拡大を防ぐには第一次伝染源の確実な防除が不可欠です。

前年の落葉からの子う胞子の飛散は開花前の3月下旬から4月上旬に始まります。3月上中旬の平均気温が高い程、またナシの開花が早い程、胞子の飛散する時期も早い傾向にあります。これを防ぐために、12月頃に落葉の処分を行います。近年は、植物残渣の焼却処分が困難であるため、土中に埋めます。例えば、背負い式動力送風機又は熊手を使用して、圃場内の樹の周囲及び園の周囲の落葉を集め、ハンマーナイフモアで細かく砕き、その後、トラクターでロータリーをかけて園内土壌にすき込むことが有効です。

芽基部病斑からの分生子の飛散は開花始め頃から始まり、5月上旬から下旬頃がピークで、6月中旬から下旬まで飛散するといわれています。これを防ぐために、前年の10月中下旬から11月上旬にかけて秋季防除を行い、芽基部病斑が形成されるのを予防します。また、開花前後に芽基部の病斑を見つけたら、その基部から切除し、園外へ持ち出し、廃棄します。

A：罹病芽基部



B：被害落葉



図1 ナシ黒星病の第一次伝染源